

# 相生集

五名勝  
六回

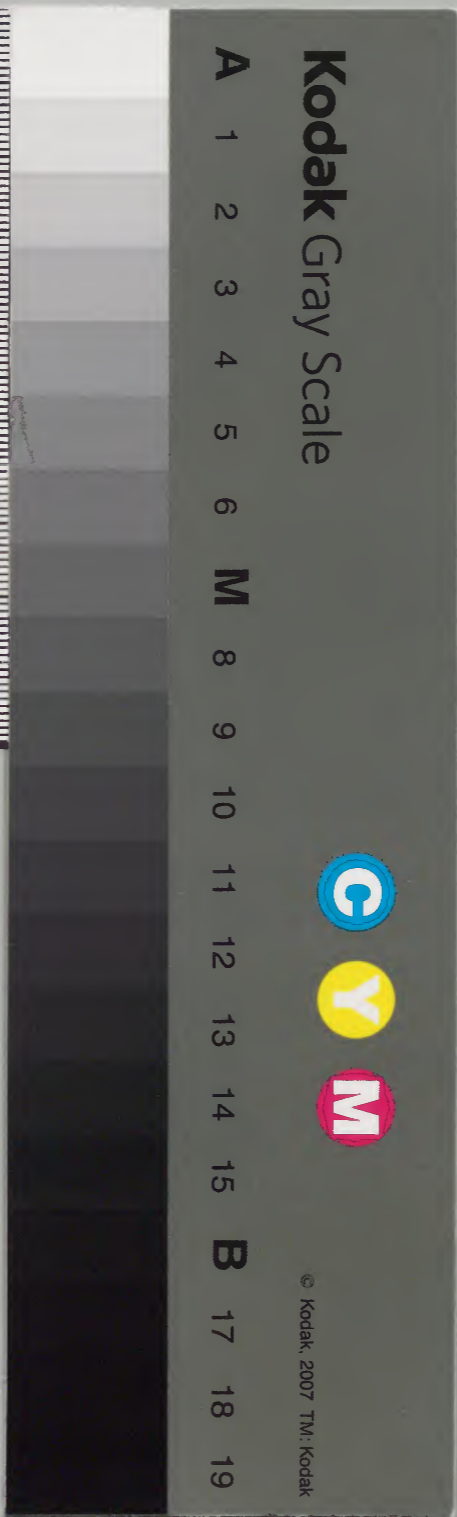
三

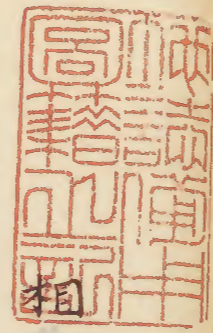
					和書門類
一	一	一	三	六	五
冊	架	函	號	一	三

庫文閣内			和書類
七	三	六	五
四	一	〇	一
二	冊	三	號
三	架		

内閣文庫	
番號	和 36513
冊數	10 ( 3 )
函號	174 318

共拾





生集卷第五稿

外史  
大鐘彌兵衛藤原義鳴輯

安積山

系葉良所謂安積山是之今之指とも不定なり或ハ安積郡  
中ノ山ニシテ或ハ片平ナリ類名ノ本名ナリトイハレハ日和田  
村ナリトモシテ其ノことハ以テ系信然ヤシ事ナク世ノ人々  
其ノ山ナリトイフハ日和田村ナリトイフハ重慶院ノ四不難  
院ナリトイフハ日和田村ナリトイフハ重慶院ノ四不難院  
院ナリトイフハ日和田村ナリトイフハ重慶院ノ四不難院



治ひしあり是のふもえ和兼甲今の安後らの一筆も無むを  
 柱多ふと南朝の重信をふりて流しこもあさうらの姿をれ  
 禁のむをいひ柱多ふと流しひしこふ柱あるとの感してそ  
 わを極むてありと徳林尾花のこえたるも古墨集にひら安後  
 山といふ事首よりいひまじり江府の招月と南朝の重信公も  
 是といふもあつと大坂梅月八片手なる額名らとけりて安後ら  
 かりといひしと招月と絶してまじの意をわくさう人こ  
 笑ひたるも一記ありと皆日和田ありともまじこもあつたり  
 さてそふ引たる雜記を文明十八年より四年までのゆ紀  
 のゆく天保十年より大元二百年までありたりす付既ふ

そふありしと今更ふとあつといひも甲斐なるも業ねり  
 ともあつたりやみりんとあえりしひの額名らのゆ名ありと  
 いふといひしと押涼ゆりてはとまじとまじと次押額名らの  
 けりともひの御隣の群らまじりけりりみりしと尾とま安後  
 神社とゆとありしとより もと安後親重世よりゆりし  
 なるこりゆけらとまじりてあつひま  
 りりてあつといひはけらと古より安後らと唱ひしと安後ら  
 安後らとまじりて安後らとありしとわらしてまじりて  
 安後らとまじりて安後らとありしとわらしてまじりて  
 安後らとまじりて安後らとありしとわらしてまじりて



を海軍の職と海軍の証と爲るに非ざる例は  
多しんやうと云へらひいふもよくしつて其意の  
細る如雲の窓の如く佐之同の聞を志ふありしを  
書し  
皆日和田のをさしたるもこの世の書めく去人の  
そとものもわくわくせむと人の海とせむ日とて我の日本  
し名所もいこと多しとせむ未女のあま入りてうりな  
世もあらうとせむいみぬ人をも名とせむと身は  
奇に之れをたらしけり撰集めりつてこそして  
名もあらうとせむたな定つていぬるし義鳴主地  
事ありしや志ふありしと和國の名もいしと天香具の

とて今もそを定つていぬるし義鳴主地  
去人も同めりしと志ふものわくわくせむと宣長  
とそとと尋ねたりしとせむいみぬ人をも名とせむと身は  
習めく末の世もありていしとせむ未女のあま入りてうりな  
人は舊とありしと志ふありしと和國の名もいしと天香具の  
ありしと志ふありしと和國の名もいしと天香具の  
いし野洲良も聞老志の証と四國雜記之標註ありて  
後人の附会  
此のものと志ふありしと和國の名もいしと天香具の  
此は僅る引直りみと書たり他邦の人わくわくせむ日とて我の日本  
と志ふありしと志ふありしと和國の名もいしと天香具の

是じべー。野洲良考小安積山といふも日和田路の邊りたる  
 一孤山といふも觀遠志の云ふたゞも此と後世なる所らうに  
 山名有たるは古くあさひ山といひて今の通名よりい  
 臥里計の方めて南郡のありあまひ山といひたるは此山  
 あり於西も今津郡のありけり此らちふ古の官道ありあさひ  
 多し此古た片栗村のありの方す里計りふ山乃井の邊あり  
 此の東女う碑とまたりあさひ山安積山の麓あり」と有り流石ふ  
 中よとてあまひ山といふとたよりありてふありし  
 ありまのなりくるをまのたよりを古野山川後  
 名は後山更級郡の更級川安積郡の安積川と中名は後山更  
り

といはるるやふとてたうのなるは推してふ  
 後又友人が多度海が考ふと界兼女うとふらありさうと  
 安山に玉井村ありとあるといふ山ふありしは之今ハ割れた  
 後とて安山六年正月廿日割安積郡置安達郡と見ゆれば美濃の  
 安山といふなりといふありとありとありて形もいふとふ  
 山あり又其のありのゆかりとて姫君といふもいふ山といふ  
 けいもあまひ山といふやうにありたりふわりの法ありといふ  
 とありありともうさ山清水ありとあると知る所る奥の常と  
 水底よりいして一村乃中ありきといふれんとするといふ  
 かく人のところといふくといふき法ありたり所なる後の兼女

みさきとさるるりし小あらしやありぬとら名も前の妻女と  
 りたまふあふまゑに源氏物語小を以て後院もあつた  
 事ひてまゝとてゆき加茂の大神のまはをまをふりて  
 以て大月とまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
 鏡法皇とまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
 ありまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
 法皇とまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
 又東國縁の法皇日和田乃右の方乃よりまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
 たりまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
 又此のまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井

国よりまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
 小山有り古人乞と安積のまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
 うまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
振舞の池よりまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
まのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
 山浅香浦有りまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井  
 うまのつてもまゝとありてまゝと玉井岩井

国歌所詠

歌書の年代別序より  
のこゝろありてまゝとありてまゝと玉井岩井

采女

萬葉

アサカカ ヤミカケサヘ ミユル ヤミノ井ノ アサキコ、ロラ ワカモハ ナクニ  
 安積香山影副所見山井之浅心乎吾念莫國

古今序下の句清くまんとありてまゝとありてまゝと玉井岩井

市原王

同  
待時而浴鐘礼能雨令零收朝香山之将莫變

新拾遺集腰の夕雨とくさくさみ人きくくはは首の

秋清ハ人物の條下又知ろしハ

詠哥本記  
浅香山影賸見苦烏山之井之浅麼者人乎惟生物欣只

前内大臣基

續古今  
八雲たつたを流とと浅く山あさくも人のねとくさくさ

古今の序の同もくさみゆりくさかの中

僧正榮海

新千載  
あまのたの君あふ安後らあさくを浮りてあさくし

世のわねて修の法序にあさく山と越えりくさく  
首の事とさひゆくさみくさり系

蓮生法師

新勅撰集  
古の我となさく安後らくさく山井の秋しあさく

人またのきくさく

光孝天皇

後拾遺  
浅く山秋あふ雲の風とくさく山あさく山我ハりくさく

後九條内大臣

史本集  
あさく山あさく山あさく山あさく山あさく山あさく山あさく山

常根好忠



全  
淡茅や安積の山は極むとみよてもよそよもはる  
仁和亭観念

常陸丸

全  
伊つねり大いそつはらのちやめくは江ふくもみじぬ  
唐歌所詠

東奥名高安積嶺曾聞来女詠哥傳仰觀俯察大分小影

落井中如一拳

こゝ我々首翁の侍りて予詩集 卷四 十五 小出より古人の侍ふ

於て義吟の始りくころをふくむ録と

國書所載

安積山 八雲山抄尾張或ハ伊勢國 又五段奥陸奥ハ紅葉 安積山 合類表 用集 安積山 名考

あさつ山 紅葉集 安積山 方角抄 廣垣草 安積山 秋の 蘇足

あさつ山 大和抄陸奥と秘りある男大納言のひとめとめとみ陸奥 安積山 名和奇案 陸奥

あさつ山 奥陽軍秘傳依竹家仙通御天正十六年六月十日の案に政宗公功有と 安積山 あさつ山と山ははらう歌の極みくくは陸奥軍の序あさつ山

安積沼

日和田村東勝守はうらぬる沼田耕地を極波ととりよ地  
あつたまりてあつたまりのあつたまりのあつたまりのあつたまり  
とやと岡田あつたまりのあつたまりのあつたまりのあつたまり

義時曰く家之ハ所ナク  
 相違つたわのりし  
 ありてありはたれも其  
 社の事日して今より昔未  
 小にあり看すればはは  
 とあり多し今に派し  
 古とありてありはは  
 宗徳の孫日記しては  
 川ありて宗徳のあやより  
 あり

田とわたりて後女取つて方とて深草生ありて水ごとくわたり  
 ありわたりて年月移りてはわたりてなかりわたりて石碑を  
 わたりてわたりて後の名を標とありありてわたりてわたりて  
 危勝見通考とりよとのところを女士田梅女宗之の孫日記より  
 やてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりて  
 後女竹のりしわたりてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりて  
 なる庵室あなしてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりて  
 事わりの後のわたりてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりて  
 前とわたりてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりて  
 後にてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりて

有亡成田友時乃和藤授古安積治の改書より安積の治とい  
 るは今日和田の里は東後寺といはる寺の後の田と四辺と  
 わたりてわたりてわたりて中の中の産ある形勢とありてわたり  
 和里と今の八和田村の里名ありて中古ハ八俣といはる  
 八和田も里名ありて今の名を改めわたりてわたりてわたりて  
 ありてわたりて八和田を日和田村の坤の方とわたりてわたりて  
 八和田よりわたりてわたりてわたりて日和田村の内ハ今形は八和田  
 和といふ名の地もありて八和田を日和田村の田名ありてわたりて  
 今や治政ありてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりてわたりて  
 よりわたりてわたりて治政して柳の小池とありてわたりてわたりて

ゆく乾の方を富浦池 又今津より山立跡と推すことこの  
方より荒地よりも有て是の名称を記す 山限り

南より大山田小山田を今の方より八丁目村まで

伊豆宿立山までと云ふと成田氏の流り也一軒跡の西なる

早稲系堀内林りよと云ふと云ふり一と云ふと云ふと云ふ

河内村の跡よりと云ふり夏止と橋と伊豆中伊豆堀内早稲

系日和田七村として東八丁目村までありて二里計り同く

くわくくめく 蓋早稲系より堀内より西に地ヶ一と云ふは  
伊豆日和田を云うては堀内は是れし是れに云 伊豆宿跡にありて

おつと云ふ 伊豆大方面にありしもの也  
自今河の跡波のりふ云 自今大川の形も古の流

る河の跡を彼流跡の名を明くは七村より今も幸うつ

るくねんあえと云うて今漸満たる湖も今之の海面と

いひ有るいふ事あるなりと云ふこと今もいふなりこれ

おて好りふくくの流跡のいふことめをとういひこと成を

松苗代の湖をいふこといふ事なりと云ふこと今

河のいふことあり今八丁目村の流と云うていふこと

川と流と云うて今の方をいふことと云うて今もいふこと

今いふ今いふ今いふ人なりと云ふこと今もいふこと

跡のいふこといふこといふこといふこといふこと

れ士田のいふこといふこといふこといふこといふこと

たふと云うては村のあり方と云うて今もいふこと

浅香の流の跡をいふこといふこといふこといふこと

おとふをみるくわのくらに流のさし時なあつらさるるく  
限りぬふれをぬくあつらさるるくみゆをるんあ代をぬふる  
標なりあつらさるる國志子の考雜記あつらさるるの流ハ安積郡二本  
和願寶源村小有り今ハ宝源流といひ和和田郷の流と流す  
流川といふ是又官方の流ハ福系福系の流といふ大流有りりもと宝  
源流と流れぬくといひ安積流といひ考又安積郡小川といふ  
さつらさるるも古く流ぬるる實地りハあつらさるる片平村より  
と一里計り南郷といふハ亦く小流地多く荒蕪蒲志蕪をさるる生  
有りて自然の流流あり此流の同く人の通も有り歌々ぬふらふた  
流さるる古流の流有り是別安積流の實地とさるる義鳴といひ

我邦内ハ宝源村といふありて宝源流と福系流といふも  
一つありて是は流とさるる流と云一且宝源流と流ぬるるありて  
か後家の村流と云ふは流といひ安言流流と云ふは流といひ  
り小國志子ありて若ぬりくん波のありけむり流と云ふと  
いひ流といひ又流といひ流と云ふ是別片平村の里流といふも  
志つりし事ありて志つりし田の流も畧るるは流といひ國志子流の  
川といふ流といひは流といひ也是の地もとさるるの流ありて  
そのあやとりを志るる初学のたりぬ是と解とさるるまたの  
如し聞老志ニ云安積流在日和田西去安積山西亦十里余  
其地塘廣二丁余如今不生菰蒲却生蓮者多云

聞老志ニ云是ハ前行ニ書  
ハレ流ニテハ中流漫録ナ  
トノ例ナリ

義鳴曰くこも好あさりの旧地とありくゆきり  
記したるゆきりもあさりの旧地とありくゆきり

中陵浸録ニ云淺香沼古哥ニ詠シタル奥州淺香沼ハ今  
之會津之安積郡盤梯山之下盤梯湖也此沼ニ花カツミ

ト云草育リ後菰ノ一種能ク實ルモノ即チ菰ノ雌ナリ云々  
義鳴曰く林春喬乃會津土直考ニ人王五十一代平城天皇之

大同元年丙戌猪苗代湖湛也云々又山崎氏カ山水記ニモ  
平城天皇大同元年水初湛為或云本二莊云月輪云更

科水瀑湧而居民穢ニ莊壞矣ナトアレハ古ヨリ之湖水ナカラ  
安積沼トモいひ一事ハ乃を依抑北湖ハ周廻百里ニ近記

ゆに元我の安積郡の管とあり十の二日及過行る一のゆに

ゆに安積の名を自とてゆに柄なりある且一のゆに湖を

安積沼とて四河の有りたるゆにゆに人の地し會津

旧事雜考有るハ四河合考をとりゆにゆに事とてゆに

ゆにや浅録ハ水府之士俗稱依藤平之齊中陵ハ川  
是号リゆに人の

ゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆに

ゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆに

ゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆに

ゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆに

或翁乃考小日等ゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆにゆに

福存より後とりし奇んよりしつは桂桑の事要客に陸より  
ありとてさくあさの友あさりなりなりあさりなははの事  
わさりとていり

義信曰く桂桑と三春封内田村初めありて奇ハ別考考の  
とみたるなりとりし事ハ著聞志に出く既ハ文化十二年ト  
りて其藩士秋田勤解中とりて人々信の涯々石碑と建んとく  
権中領を實跡卿小島集くせてものなりとりし碑文と  
見し事有り又洛乃海過氏と進めあはく桂冠出嶽集  
と桂鳥の故事と漢文にけりしと兼をたり置りて田村  
高治の事とてなりて安積の治めあはくけりし事あり

国歌所詠

尾島井君

秩衣下

似打ま

妻川下

花らみ川よりたゆめはらめとあさりの治也水也池也  
そのくさけなひすもろくさひるとつべた  
ちんくういとうく  
年ふとくふく源々れちあさりの治りちん池也

秩衣今

六月よりとて小菴の事なり安積の治の地也

紀伊

湯川百首

五月雨のちりさくは水埒りちんく川の治もやま

史本

草枕ゆきと流ぬらみらのきのあさうの沼水鴨の羽風

良玉

君うたれあつた物と隆勢のあさうの沼水鴨にきてて

能因法師

家集

月やともあさうの沼の水流みむし能乃ぬひくそを

忠見

家集

暮れぬくあさうの沼の物なけなをぬきり名のみこり

之美

國書所載

安積沼 名寄

あさうの沼 八雲抄

清香沼 史本

新香沼 史本

安積沼 方角抄

安積沼 彦坂亭

あさうの沼 和智林の巻

安積沼 秋の

安積沼 初内裏  
鬼向也

あさうの沼

義経記を以て奥羽の事と安積沼の事と  
たて置る日の因ふりありあさうの沼は月夜と

あさうの沼

軍秘傳佐竹討陣の事と政宗公の事と  
思ふをうらむる事と連るるも居るなり  
思ふをうらむる事と連るるも居るなり

清香沼

新葉考文記 卷四 神名式ナトニアルハ伊勢の志知世

ゆもあさうの東也と同名あるんを左の記に記しあり

義略曰く安積沼のかきりたるもあさうの事ハ亦も記し

やくあさうの沼といふもあさうの事と云ふは是則安積沼の事

あり也但沼といふ選海ノ賦ハ海ノ廣ハ沼ともあさうとも云ふ

入江をいふるも秋の霞沼大がく怒ぐり出羽の雄湖唯湖と

海ぶつてもさつひいし例ありふとハ妨けし尚波よりし

国歌所詠

人麿家集

百葉十四  
安有可我多志保悲乃由多尔於毛敵良宇家良我波奈乃  
イロニデメヤモ  
伊呂尔氏米也母

正二位知家

川三帖  
あさう鴻ううう花のいしきんこきんをねくもまつ

友原顯仲

長玉  
あさうのつらと意しきのたさく片しく袖の落るねぬ

國書所載

淺香鴻 名義

義鳴曰く氣の勢を以て干のゆたは有る事之れハ大やうハ  
海なつとあるまぬ之をねん氣もいひしやうは  
それらむらかりしうり宗之も海と書たる計り如き  
地邦をそと大よとて海なりとこひて塩干の事も  
ある今や聞志也とあさう鴻とあさう鴻とと出し  
不詳土地ととあり不安種活のありはる湖活ハ  
こゝろありむらむら活の事とてうらむらむら似たり  
録しそ後の考をす月但六帖ふ常陸ふるあはつ力活  
むとこつと月ハ地とるあをあをとりし物ありはる



今名乃江ありとていふは酒も彼亦ありとていふ

浅香浦

義晴曰く浅香浦乃とていふは酒も彼亦ありとていふ

國語所詠

俊成

身は志ありて心はなかりとていふは酒の秋は初風

山井

片平村より有り方野同汗の秀水ありとていふ聞老志より  
去安積山西一里余今市村中有小池為廢井久後人恐失

陣迹也以竹籬圍之總存其地郷人曰之山井とていふをたつ  
るり日和田乃古名をいひよとて彼の處よりさる井ありと  
いふ但片平を日和田より大方ありとていふは是れ片平の  
事なりとていふはさる方乃ありとていふ

國歌所詠

秀女

以山井井火 安積山越えとていふは山井の浦とていふとていふ

蓮生法師

前二回 古乃あといふとていふは山井の越えとていふ

為氏

後千

影とあは伊とそふあしをいつひふらさうのら井のち  
はあみあくとねんころあふひてあひほさる  
あさふらちこくふとあまをぬちとら井の影とあふん  
ほふふ

くみとあしをやうくやうら井はあふふや影とらふふ  
とみんあし

ら井の浅い水をあしとぬを影とらうのあ人のまゆあん  
あふふらちこくふとあまをぬちとら井の影とあふん

紀のめあし

後藤集巻一

影とあは伊とそふあしをいつひふらさうのら井のち

ら井の

平貞

同

影とあは伊とそふあしをいつひふらさうのら井のち

ら井の君ををくち

口根

影とあは伊とそふあしをいつひふらさうのら井のち

右馬場督伊通

全葉集巻下

ら井の影とあは伊とそふあしをいつひふらさうのら井のち

待賢門院堀川

新和巻一

影とあは伊とそふあしをいつひふらさうのら井のち

影とあは伊とそふあしをいつひふらさうのら井のち

真風

後拾遺五

清くは事とたむことおもひしつ絶やううふら井のあ

弘安之奉百首奇なりし付 権左納言曲侍

同日

夕や〜して清い初なるを傳ふけくら井のあさふあうと

信實朝臣

後拾遺尺教

らの井のあふん新なるあまう〜あふんあふとぬふせとじ

意の奇と〜 夜原宗徳朝臣

玉葉五

新なるう〜とあ〜との榮めて清くは中ゆら井のあ

百首歌なりきふ付 藤原大綱公為世

同日

らの井とま〜らみ〜はぬ清くは新なる〜えぬあ月面の比

意の歌の中ゆら 堀川

同日

らの井の清くはをきりぬ〜新なる事きあひいたふふ

源邦長

同表四

らの井は清くは〜もたのあ〜と新なる〜世の榮〜なる

壽成門院

新千載五

あひ〜と〜方〜とぬ〜ら井の底の〜らとぬ〜と〜は

冷泉家系大政大臣

後拾遺五三

せ〜としら井のあは新なるあみ〜は〜と〜ら〜ら

平隆親

院百五二

見ら〜う〜及人のあ〜と〜ら〜ら井のあ〜ら〜ら

菩提利苑院意園白

同

深うぬ安ぬうの影たぬと山のおれをいふなりん

史末

信ふよぬ消ぬありひやら井のぬもよぬとくさうなりん

信明

同

とほつともくさうぬさんら井の意一さくの影やみゆると

義崎回くらの井を述ゆぬの同者有りて影やまゆふと

との中少ぬ彼愛のともりたりたうよぬ兼女の音ぬ縁

あさき道とてたりと今ぬい同志ぬりたりと

くくぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

國書所載

山井 名和和歌集

山井 史末集

山井 和歌集

山の井 方角抄

安積井 名和

あさうの山井 藤原集

山井 同書山の井との名有

山の井

源氏養巻小らの井の水もところりみとらさく湖水抄くやうくとくみ  
とくさうの井くわいぬわみぬくらの井のわらをとあさきとぬとくみ

山の井

大和物語とわらぬる男のわをみてあさうの山井はたぬたぬ大納言の  
娘のうらひ井ぬ名と捨たる事とのわらり又去る事とくさうとくみ

山の井

松草底井の辰ぬ山の井けりも浅きなりはさう  
始ぬらん春曙抄小陰をさうりねあさうらう云々

安積里

今日和田の古名一及び片平村の事としんたさゆ

いづととを搜古小八幡の宝庫ぬ永亨十一年氏祐とゆ

もの出をい沙幢料の古文書村付江中上岩倉片平の月

上飯澤角澤と今飯澤安子飯花田川今飯田安積宿野

田原 今の早稲 小村と小郷と程のちとわく村順方後と行は  
日和田と成て安積宿とありとぬふとと有りともうと澄  
ぬふと

國歌所詠

師頼

坂川百首 比長中々おもしろくはうり 隆秀の 里小旅麻しあけり

國書所載

安積里 石寄 ちさうに里 名乗集

安積原

千地未の地くおりの日河内村は原と字とふふあまて

志つと安積山は遠くぬあさうさもふととそ名残は  
あつと 安積の原の名残りとして名知と  
少地あらぬもあつとふ

國歌所詠

範永 イニ乃氏

彦吉介イニ乃長百首 六月あはれとて小菴の原はなり 安積の江乃を地はなして  
義晴いさくこは定うぬ安積原の分とのもをわつと  
夕れ天授古の例ふもてそく川直に其

國書所載

朝香原

名乗集

霞谷

秋江深き小古今の記と云味國新谷江証として陸奥在  
同名ありと云新の谷と深くと深よりと云と云名ありの  
去人も未だありと云一り義吟梅よりありと云新の谷と  
深をたるとありと云やと云ありと云の中より谷の名と云  
ひひーめん平ねー

國歌所詠

深養文

六帖

あさこふ新の谷一深くはありありと云世も

深草はみつとの沙國忌の日と云

康秀

古今哀湯

草深き新の谷と云一照日の香一と云也あり

國書所載

霞谷 和集 霞谷 秋の森

逢瀬川

久保田村と大重との中間官道と標しり又流る川是なり  
古俗大師川といふことアアセとオホトの川の同しとすん  
化たるありん五嶋翁と只彦く云ん河身て逢瀬川を  
指すも之をいとも標しりこととす和集秋の森是なりとす  
以川陸奥國ありと云と云と云新義新古の記と云種と云合  
と云ると云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云

たふさふさといふ女加ひし但此巻垢金の透りも透ぬ川といふ  
との有りともつとてとも開を志す所ありりつとていふ義場の  
つとてありやありとんけく旧事考女界大師川といふ  
本里乃西乙流てふ女女大師事ありとてとて通て流ありや  
あつとて大流てふ女女ありとてとて大師川といふ書も謂れ  
或は九重川といふ杜撰之又初山の西より大流てふ村所を  
ありて流ありやあり川は九重川の約ありとてとて  
是も必とてとてとて又一巻九重川といふ是も九重川の旧名あり  
九重川は流ありやあり私列を智教小治村業の寺の流あり川  
河村流あり波ありとて水名ありやあり昔の人名つとてとてとて川といふ

横梅より人生の事ありとて女同好と書とてとてとてとて  
唾といふ是も女界の器の流ありやあり唾といふ女とてとてとて川水静り  
やありとてとてとて無月と称しとて女あり川といふあり川あり  
俗人の混り唱ひとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
美と唾の仇ありとてとて一名津川といふとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

国歌所詠

頼義

我家百首 子中  
あさうの山はとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

藤原盛方

新撰古

程もさく流してさるる通瀬川にさるるをやはらげたるん

是本

せむとあぬ人の境なごころきておれもやぬ通瀬川にさる

大綱言雅定

重定

同

通瀬川神つくり針り浅くぬと君ゆめさるるのいそごとわさるぬ

國書所載

會瀬川

名取和分集

會瀬川

是本

會瀬川

和分集

會瀬川

原延草

會瀬川

村の存芝  
隆秀

私譜橋

郡山と小原田との間古海道とく今の道より東橋塚一約く

原の二つ池わたり清乃橋まじ今界して以来橋よりさるる義橋

梅ややるる橋よりさるる城田男乃社地義橋とと浦原ととも

有りてゆきとくくねと種義新古新又東路のさるる

橋とあふつは彼はあめもさるる橋ありと知へ

さるる信達新考証系信達風土畧記系私譜橋ハ福島の

入りの橋とくさあは二川の内河道の橋也や未修くおむ

新さるる大音着の考証又橋乃事と新んころる編てさる

るさるるさるる橋とくさるるさるる種義新古の

新さるるさるるさるる橋とくさるるさるるさるる

國歌所詠



武家百首 五本

頼義

東路のさやしの橋中絶くあみたる今もあつさり

懐中集

懸野のさきを川をわたりてさやしの橋をのひくふ

名取のさきをのひくふとみらりてして引きりて平に橋の

あまゆいんはまの考証の一助めなり

片平越

右概の旧小惟子ととりあひする事又と今の萱原を

片平越の地なりとらるる事不明なりとひたふしや

國勢所詠

是本

陸奥片平越より袖ありて子越ぬとゆふ吾妻山に

稲苗代兼載

安積山片平越てまゝくそわが初なりと記す長法ととも

いふと一説にまゝたる之出極未詳

以上拾遺村安積郡管内

安達太良山

美濃小所謂吾田を長山と云ふ又阿多所安達を長山と

いふなり邦人の所記なりあはれを以て西嶽といふなり

諸村をまゝかりて遠く合津原の肩絶し御隣のまゝなり

日乃極めく晴たりんれを尾とより富士山みゆふといふなり

之懐優花 了白河以東連日所仰阿達多臘山今過也下

雪色来襲 金裁カ 以比集 為天下險恐非過甚之言也北山

力東蔭集 山勢屹然高聳雲外昨兆翁カ 馭燈隨筆 余北度越山之

險南沉溟海之濤平生之壯觀以此遊為最と言ふるは宜し

了此 漫遊文章ニ白河以東云々其秀者在西南

稱二本東北稱吾妻中 此山並秀為伯仲故土人以二本為

太郎因以吾妻為二郎中 故呼做安達太郎猶以利根川為

坂東太郎耳此流いとくやとめんと郎の字とらの假名に

用ひ一例亦もくうけ廻一 所ノ字似たりより後同ハ何を長標書

考証由ハ蓋全思西意安多當也多良是也と士由を思之山の

名の起りたるんうや日本武尊於此りけりましくて橋姫と

よひまひ雅 雅の願めく吾孀者耶 嗚呼可憎と宣ひ一りの

と仰又信母ありたりと名めりなりと安反親重ハあとたはら

ひあとたれあたらは通意とそ子重海のたをまひ

兼海りもろうぬり嗚呼是トハ流の極りもろも也と

鈴本廣積ハ如 安達を長らとりけりハ此りハ

一海りもろくわく日さうり天を志のちもるわハ

列島の後 列島のハ名も有たりなりんわハ名ハ義ハ安達

ととより備字あり天を志のちもるわハ

白雲のふきとあけ天を志のちもるわハ

あゝ能くもくしはくを舟よりよまふことおとりのよき  
事あり今も是をを舟とて波舟といふは是なる事あり  
たぢりつりの群はよとくれぬもよを長ふといふこと  
さいつり行はつ是ぬらんやまぶぬといふ。岡田耕筆重厚活  
盛園の城下よあたたららといつりの多葉集中に根はふは  
まゝとあたらら真ちよのまふあといふ今柳の社と名  
付らひ有とて以て毎にうせ有て是ゆをを信ふまゝといふ  
ちりといふ果しはあつとていふはしはあつとていふ  
士由重厚の話を歌したる説日録に三ゆまあやといふ既  
まふとていふとていふとていふ

国歌所詠

多葉十七おまけのまの  
安太多良乃禰尔布須思之能安里都、毛安礼波伊多  
良牟祢度奈佐曾禰

忠文之隆秀乃將軍なるりてくくまをる時とれ  
男ありまふ人と監乃令婦志のひていひいひ  
あり令婦やうりといふたうまは  
みらのくりあはらのらまるといふにいふわうとの長町といふ

史本  
雲いゝるあゝとていふのたを存ふの傍まふとていふ伊ふまうん

國書所載

安達嶺 日本紀畧

河津のふもと 康垣集

安達を良峯神峯 能因通記

安さ由良参 名考

あさくらね 公言山抄

吾田多良 打集集

安達原

是もよき方一ちり以名不詮は姓首一帯の系なりし竹の  
名之今ハ大平村矣ノ戸主家の是旧跡なりと名勝志ハ  
お之寺南の方を越く若狭小浜より武町高谷西海田の方へ  
よりあふり月川の是旧跡なる平地よりと捜古ハ大平石大平  
あ村の境より七高より川又旧跡なる平地を旧跡といふと  
なりそ是の烟原畑と唱れり一記されあり金谷抄ハ今今  
沼袋安達牧の旧地といふふもや強く黒塚の是より記る

是もよき方一ちり以名不詮は姓首一帯の系なりし竹の  
名之今ハ大平村矣ノ戸主家の是旧跡なりと名勝志ハ  
お之寺南の方を越く若狭小浜より武町高谷西海田の方へ  
よりあふり月川の是旧跡なる平地よりと捜古ハ大平石大平  
あ村の境より七高より川又旧跡なる平地を旧跡といふと  
なりそ是の烟原畑と唱れり一記されあり金谷抄ハ今今  
沼袋安達牧の旧地といふふもや強く黒塚の是より記る

国歌所詠

能因

更本

みらなくは信実の誓をこころに志て安達原と仰ハ能ま

百首考

寂蓮

全

男麻衣う安達う系たみらしてこそわかくぬ我限のね

今らのくまららむ聖なるゆりたる女

新古今

二重

あむくやうとほの村をけしけしけ安達う系たみらしてこそわ

最勝曰天王院障子

松道愚草

定家

時雨の安達う系乃高きふくく朽くてぬ秋を乃くぬ

新古今

承考出

白妙はととのふけり衣阿達う系乃高きはくぬ

系乃角集

ほののまや鬼こもるも夕をみ

維舟

若草や安達うくくもまの角

乙由

圖書所載

安達原

原野草

安達系

名系

あらの系

安達系

系

河立原

最勝曰天

安達原

秋の原

安達野

名不詮小系野と別に出して安達野とすハ安達初の内

初乃乃幸と相見してとけりこと保之原も野と早夏ハ

一つありさねと秋の原是もも美不女出し乃り例ハ

ね

國歌所詠

更本

安達乃秋風とて村とてさあとのそや 藤乃のりん

全

安達乃尾もつくとて乃の玉ゆら や藤乃のりん

親法師

勅撰撰述抄

安達乃秋風とて村とてさあとのそや 藤乃のりん

國書所載

あな長野

原坂岸

安達野

名所

安達野邊

名所集

安達野

名所集

あならの野邊

義經紀東りのあた下野の邊は八幡と  
りてあそびて字はあ大明神と依あふり方の  
のり

あならの野邊のありの野邊 ところろろ安達野の邊ありの野邊の里  
あならの野邊のありの野邊のありの野邊のありの野邊のありの野邊のあり  
のり

黒塚

石炭

安達う原あり今観 寺の例あり塚のそよ木の古木あり

あならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とて

あならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とて

あならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とて

あならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とて

あならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とて

あならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とてあならの野邊とて

兼感小隆矣其安道之系乃思極といふ古奇あり不<sub>レ</sub>安達原より  
附より思極ありとく<sub>レ</sub>遂に後れをぬりぬらるとあり是を  
つら<sub>レ</sub>付とていひ<sub>レ</sub>りて安道之系の田地といひたるは名勝志の記に  
ゆく思極を別今の地の邊といひたるもや尋ぬや<sub>レ</sub>江戸  
名所図會に思極とて記すあり世俗<sub>レ</sub>別々の安道之系といふ  
誤なり<sub>レ</sub> 別々の思極は二か所とす  
の同よりらの地あり 思極も別々の海ありは  
混<sub>レ</sub>交<sub>レ</sub>りたる<sub>レ</sub>いひ<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と書<sub>レ</sub>くは<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>たり<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ事  
そらのくの安道之系といふ古奇といふも<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>たり<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ  
も<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>たり<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ事あり<sub>レ</sub>即ち鬼女の系といふも<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>たり<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ事  
其の細なる思極の岩屋と一見してとある是あり<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>て

鬼女の伝と物異類をい<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>ゆく<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>智<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>漫遊文  
草子に石窟の<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と大石無數相靠石大<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>五步十步  
而近地石極窄是為<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>と書<sub>レ</sub>たり<sub>レ</sub>ゆく<sub>レ</sub>奇<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>  
○聞老志に阿武上流經此原野而其河東謂之安達原其  
地有<sub>レ</sub>巨石長丈石面土人呼<sub>レ</sub>曰白檀相傳義家朝臣征  
時蹊<sub>レ</sub>木<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>而登<sub>レ</sub>石上射<sub>レ</sub>而殪<sub>レ</sub>夷<sub>レ</sub>賊<sub>レ</sub>賊<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>畏<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>痕<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>于  
石上南印<sub>レ</sub>三足<sub>レ</sub>址<sub>レ</sub>于原上義家射<sub>レ</sub>于石上<sub>レ</sub>從者走<sub>レ</sub>拾<sub>レ</sub>其矢之  
痕也一步阻<sub>レ</sub>十六七<sub>レ</sub>丁<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>步<sub>レ</sub>原<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>鏡<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>此  
以<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>ゆく<sub>レ</sub>拾<sub>レ</sub>遺<sub>レ</sub>集<sub>レ</sub>兼<sub>レ</sub>感<sub>レ</sub>の  
記<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>詞<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>郡<sub>レ</sub>里<sub>レ</sub>塚<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>たり<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>ゆ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>代

氏は考ゆらむ十に初むわうのけらひ安達初しゆ名  
吾初といひくふ也といふこと名初と武の三十五初し  
始りくつるるも道に主以初より安達の彼方ひ法ま初名  
ありたるときと名をそ安達の名名ははくくさやわい  
こは兼感うけししむありてまはやより一ぬるくあわ  
証して海とてふあしう  
名義 親重曰く黒塚と  
名付らる田中ひらふ極るわい也とおもつたそそ道  
未だ田あむわい今より昔あむとてはあむらむといひ  
了深く己う公尋入し日本紀景行天皇條二曰豊前國  
速見邑石窟有二蜘蛛住其石窟一曰青二曰白並其為人

強力云々是ハよりたる世の賊窟中ひはくして民之賊窟  
と集めて己う後ふ宮ふ引ふふた古蜘蛛といふはもふ  
あつ安達原もともくあをわく是とあり人の物と集む  
事と業とやしものあむらむを以て蜘蛛塚カサトコトといふ  
まう名の青と白といひ顔めく是といふういは道  
也と名を城といふ名を是ゆる少口いふ云はひたらぬ  
也と女もまれ男もまれ同一事といひりりし士由考ひ  
少の石は白塚たといふる地名もあつ黒塚も  
手顔して極るる一と名を法といひ一鏡有りといひ  
思といふ思といふ古より名を日本紀神代卷ニ云素



鷲鳥命曰無黒心キクノナリ 天照大神將何以明爾之赤心也サニイニシカ トルル  
 又云若以惡心ヲト見エテ黒心ハ惡心ニモ作り欲呈丹心オモシ  
 ト見エテ赤心ヲ丹心ニモ作りテ黒ハ惡赤ハ善ニ用ヘ  
 テキタナキキヨキノ訓ヲツケタリ又倭姫世紀ニモ無  
 黒心キクナキ以丹心キヨク清潔齋慎云ト見エ又神代直差抄杯ニモ  
 赤心ヲキヨキコ、ロトよみ黒心キクナキコ、ロトよみ赤ハ  
 陽乃色陽ハ、よくあきらまらうめして善之黒ハ陰の色陰を  
 よくうくくして惡なり  
土田按「陰陽の段」後 云中て善小黒 一方ハ善色善ハ、  
 キタトよむ善ハ、善ハ、色をキタトよむと見ると腹あり  
 善と腹善或ハ高きとよくとあふむと偽りて利をわくと

手是ちる業とくくく業とくくく尚有、くくく古、  
 城乃後一塚ちるくくく女是塚とくくくくと是女あ、くくく  
 糸而如善薩同心似夜又ふとくくくくくくくくくくくくくくくく  
 ぐくくくくくくく一尚女と鬼とくくくくくくくくくくくくくくくく  
 伊勢との語女くくくく鬼乃くくくくくくくくくくくくくくくく  
 事くくくくくくくくくく義時曰く二月ぬくくくくくく考あきくくく  
 ちひらハくくく只白志ち女對して是塚と名有、くくくくくく  
白川とくくくくくくくくくく 何ん深さくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく 氷くくくくくくくくくくくくくくくく

國歌所詠

陸奥名所記黒塚及重之の妹ありといふとすて

古今くきくろ

兼盛

拾遺集

陸奥の安達より系乃黒塚より鬼とありといふとす

建保百首

行旅

我うたれ女是や安達の黒塚小冬草わを母人古入所

百首歌集

寂蓮

史本

小芥つじまの山田乃黒塚ありといふとす

一小山田と山内と書たり又方音の記又世家山内の

黒塚とありて是黒塚山の内ありといふとす

して黒塚よりありといふとす一義時曰くといふ

黒塚の山田と書たり又方音の記又世家山内の

黒塚とありて是黒塚山の内ありといふとす

為家

新二帖

安達の系乃黒塚鬼とありて云々くも世を過はるや

國書所載

黒塚 大和物語

黒塚 陸奥軍

黒塚 名所

黒塚 名所

黒塚 和歌集

黒塚 史本

安達澤

志を只安達野の内ありといふもあらずて列下定りたる地名  
は乃ありといふとす又凡大方音考及小沢村の管内

富嶺津法内をとりつる事もありて土坂の生いぬれす  
あるとくこの名めて目と小津の里長ハ早くより野津と  
いしそ主村の旧名ぬらしとこひて土庵の名と土坂と  
稱ふる事あり不実と志しりしやと云ふ事ふと云ふは  
小津乃ありとも安達野の内ありしと云ふれ秋藤是中  
美事なりしと云ふハ主例なりと云ふ

國新所録

生駒と云ふ事

後徳寺左大臣

あたりの野法の上坂崩れなりといふゆゑ約のせしと云ふ

國書所載

安達乃澤 秋藤是

相生集卷之五終

相生集卷之六稿

名勝類

石井 安達牧

信夫原 逢瀬川

淨土松山 香觸森山

岩石山 製圖山 多景山

屏風岩 望洋山 兒臺

彩虹瀑 三雄山 島山 鉾子飛泉

外史

大鐘彌兵衛藤原義鳴輯

名勝類

野田山

霞関山

為之卿光榮御詠歌

石井

石井

石井

偽名所山

野田山

霞関山

為之卿光榮御詠歌

石井

石井

石井

石井

石井

石井

石井

有田村日記傳よりある法名を記し石井考小里人と  
一重法名といふは岩井といふをぬまりたる一好忠朝臣  
安後の岩井といふは新しき安後の内名を記すは好忠朝臣  
人ともいふは古と能くも考へて好忠朝臣を記すは  
新しき安後の古師のまゝとありぬるなり新しき安後  
の石井といふは一重法名のわうしたる好忠朝臣の  
安後の石井今安後郡に屬するともいふは安後の石井  
好忠朝臣文化十二年五月日記傳の通前より石井といふは



國歌所詠

名家

天草生一あさりの石井夏くね天照る影の道うてふはら  
義晴曰く今忠峯集と梅とくね二草生一あさりの  
石内夏くねはたふさといひらて居くうととあらん  
わくで夏の日ちやうさく若くあさりもやちかて  
秋はさつてはとらとありお文のまゝにては秋のま  
うを種くねは二首といやあつて一そむ一たもねら  
種一照ね大人もははあつていそ道一はく授古り  
堀川百首ふありとく引く一と好忠と冷泉帝此  
以の人めくは百首の地ふ入あらんあはくは

わふ保也

親隆

續古今卷二

以并再出

見方切くく人のをとりまねたる岩井のたけらのわは

定家

家集

ふふねつとも心岩わはあやあ草くねは又やむとらん

國書所載

岩井 史本 陸奥

盤井 秋麻呂 陸奥

安達牧

安達縮の評又若く安達初めも牧ありて盤馬生は是とて  
初より内裏一頁めも書くうりさくは袋村の地は去て

てハ馬糞多く出るといふ首を野馬糞といひと民をばや月  
 まで沽袋村といひ自然な唱来りといふ安達<sup>安達</sup>の牧場も  
 初といふ此書皆ゆめめくまふへくまふ旧地こそと  
 開元志及安達駒以哥考之往古以駿馬為朝貢毎年献之  
 京師者也今不詳其地是亦可惜此哥源縁の歌  
とまかり亦為往時朝  
 貢之証也と書たるを口とてさく古ハ甲斐法法隆寺の  
 國ハ及馬と養むて朝廷へ貢さるる  
元年三月に始りしなり此牧も子爵の  
合及びりてまのそしぬるなり八月ハ駒返といひ武蔵の  
 四季物所八月の系十三日といひ甲斐の法駒返十五日と  
 いふも一々今宵の月小めていふも一も高橋も鹿ぬく

酒のまとのお喰ておねとすつらねさくつらぬきまふ  
 うとせし後かき経じりものともふ法徳の牧ハ星月の駒  
 引たそまの来ぬらいつとく左右の馬乃司人ひらめらさく  
 つらつらほらまるところつとくたさ月とゆとお一いつとく  
 廿二日ハ隆興乃沙駒引も同じ司人のまをさあつとつらつら  
 隆興とあうハは牧をどより捕てまうりさるらん

国歌所載

八月駒返といふる

源縁法師

後拾遺隆興乃安達の駒ハはらつとまあふ坂のきさくまうりハ来り

生駒と

後徳大寺



名多

安達郡の野原の末葉前々なりいとゆる狗の争ふとある一

後撰

彦坂新園の杉村引ふと尾ふらふと控るると月乃狗

老証小頭昭云とらのくおふらの狗ハ彼ふり出まふ

翅の狗をりくくと乞ととりくくもり出る狗をりくを

ふねは國々の荒野の牧トリふあふとく河邊の内より出

くもり也やわさうくさぬくあまの別ふられ大煙ふを尻と成のみ

國書所載

安達牧 秋麻呂

岑越山

此地未明詳考小いさうの端ひあり命をころご

國歌所詠

藤原

尋ね来し我こそ君とぞわかる見るこころいふは忘れん

國書所載

岑越山

藤原 安達郡

以上安達郡管内

信交園

教忠村の古く伝是名村といつらう村老の口碑に残るり此村を

伊のめも名と名付へといふ或はさう地留もま々ぬは伝是名必

此地はあらご一日教忠といふいづくも負うと名ひに教の胸ハ

ほりめて名ととしらふよりそふあり一と成り

まはれりし事あらめやうき事にて知らず  
征名のあらたまり  
まらハ乞めて知らざらめや

国歌所詠

此二條の序を徳成氏の伝達考  
考証附録の序と云くはなり

草花とともる

俊成法師

河津と忍の忍乃女郎をわらひし  
あはれきるる事うらみ

更本堀川百首

あはれきるる事うらみ  
あはれきるる事うらみ

新秋河内

はらりと

頼成法師

何れと忍の忍乃岩は  
いそ中あはれひ乃花  
あはれひ乃花

徳成法師の中

源季義

同

人々の忍の忍乃岩は  
いそ中あはれひ乃花  
あはれひ乃花

徳成法師

松本

我々の伝述の忍乃岩は  
いそ中あはれひ乃花  
あはれひ乃花

士由田く伝述考証附録  
あはれひ乃花

定らぬ事  
あはれひ乃花

わらひは  
あはれひ乃花

はら草花  
あはれひ乃花

國書所載

忍岡

更本集  
陸奥

全

名河内  
同名あり

信史園

名河内

信史原

更本

信史志

方角  
抄

志の忍

藤原

信史志

秋原  
陸奥

信史原

河内

信達哥考証附録めと信達原名の史奉てそ地の考と信達  
河の福高江城を二三里に依原村有り登谷ハ東鑑小石見の  
河達初海系地なりといふり信達ハ系と世達なりや又梅の  
水互村を教是乃而みあふ村あり今も原と稱しあを水乃  
出ら山と多く信達のあら地なり不ぬ之をぬもそ一教是  
是ハ信達國ありありと此地もそ一信達原の遠るハ  
那とや信達思乃考よむてそ地ハ一信達出と一  
杜撰なりと尋りし也 日

國哥所詠

万葉七

人社とあふといふ急流こころの志ぬハ河原と志のせられあ  
服部人との依保川の教こころと信達とそそそと  
云々

洞院橋政家ハ思急とそあふ 家隆

統古今良

人目のみ思急の急流とそあふハ信達とそそと

原と露

是屋入通家抄改

新抄遺秋

あつとて急流とそあふのこころ信達とそそと

百首歌分より一思急

源也法親王

新抄拾遺良

名取川急流とそあふのこころ信達とそそと

國書所載

志のふく系 八雲抄

信達系 方角抄

信達系 秋意是  
隆興

以上伝史初部内

逢隈川

白河古事考小陰奥國白川初白川城西六里連ふりさうり  
拾余り下野那須郡陰奥小岩瀬小跨より白河初りあふ  
との二系 中興 総名を甲子山より白河の南の隅ミあり  
此より源と奈とふ川と阿武隈川といふ此ら又はる瀑布と  
阿武隈流といふ是下三千丈天下是又類とる瀑ハ少く是を  
雄瀑と云ふ 阿武志小川河源出下野金嶺嶽ニ夕信達古跡  
集畧ニ目定山ノ後然らヨリ出ルト云ハ誤リあり 此く阿武隈  
川川平く白河の名有るを此集小入たらんハ申意あり

業ふりし金嶺文集及隈水経二本松之治特長といふ如く  
我邦内と望しる小流是初より是よりて阿武隈郡松村が  
流石小捨る如く如く初つるより又揚あり是より白河人小  
對して罷あつるを下公ぬりたる 名義 白川古事考より  
大隈川文字色に書し阿武隈大慈有漫々と書し唱の同く如  
れる一流も川の名称する法を了るるに逆ひとる又奥列小  
大河二川あり名も玄城の方へ向い流る宮城の府及あまてみよ六  
妻の南初の方より来る川口と源して来る加ふ小と川といひ  
下野國と初りたる又奥列西野隈より白川初より源と存して  
来る初る川と名付て大隈川といふふべし 甲子山  
の系小 曰く古事考漫



生熊瀑布

義晴曰く生ノ熊名ハガフテ本判小ノ水ノ一説又甲子山中

一説又甲子山中

熊元より出川をくく大熊川と云

義晴性米白川のくく身ノ水ノ泉源瀑布の

熊元より出川をくく大熊川と云。義晴曰く生ノ熊名ハガフテ本判小ノ水ノ一説又甲子山中。熊元より出川をくく大熊川と云。義晴曰く生ノ熊名ハガフテ本判小ノ水ノ一説又甲子山中。熊元より出川をくく大熊川と云。義晴曰く生ノ熊名ハガフテ本判小ノ水ノ一説又甲子山中。

郡山四事考小古書云阿武隈又逢隈且化るあしく月小務立たり

ゆぬとも書さるや

川と縁々るや未なり川も常陸とあり又常陸がふに逢隈は

陸奥ふるむ阿武隈は

阿武隈も書く逢の音ふもみ々るなりん又大熊阿武

隈限名是あして書甚ふ道一但ともくむとく月川といふ

白と水川と別あてはちやつねる川も小大の字うらうらあたる

今や又流後々求麻川あも小是と流は後々あさんたあめああ

義晴曰く同不ふありて同名さうすうらなる事もありん流後と陸奥と小麻里  
阿武隈も書さるやと云ふ事ありん阿武隈の同名さうら川の事ありん  
ゆぬ 然道と紀女貞觀五年十月廿九日陸奥國勅九等飯大

寫神十等阿福麻水神等並授從五位下トセルセ神ニテ今

安達郡田澤村ニ立ル阿武隈明神也

義晴曰く此水神ハ今ノ木幡山弁天  
又ハ川邊村小田ノ水神ノ社ありん又  
あつらねはたあしと水神ハ直理小ありて延喜式ニ云々今も同初ノ田澤村といふ事ありん  
阿武隈も書さるやと云ふ事ありん阿武隈の同名さうら川の事ありん  
ゆぬ 然道と紀女貞觀五年十月廿九日陸奥國勅九等飯大

とるむ古義なるん 中蓋詩之衛風小瞻彼淇澳とあり奥と水

の隈りの字彙ニ水之内曰澳外曰隈又澳通作奥とあり阿武

大奥より稱たり。若ハ杜撰ニ臨ん。又我國と奥とよりを以

て得難一西南の隅こを奥とたりよ。 尔雅ニ陸ノ西南曰奥 東北の隅ニ

出奥列と名有り。ハ何れ也。 中 若ハ此川以テ小著と川を以

て名を以て。ハ何れ也。 義唱曰く奥を

ふ。され今この奥と云ふは。ハ何れ也。 源を以て

堂に於て西南と奥と云ふは。ハ何れ也。 ハ何れ也

云ハ西南ハ地通ニ任して。 ハ何れ也

漢之母も堂家の割造也。 ハ何れ也

何れ也。 ハ何れ也

記皆按る。 ハ何れ也

ハ何れ也。 ハ何れ也

和哥者清音於俗語濁音云々。 野別良云

ハ何れ也。 ハ何れ也

とまみじめのや。 ハ何れ也

一向又居てよ。 ハ何れ也

もとりや。 ハ何れ也

ハ何れ也。 ハ何れ也

ハ何れ也。 ハ何れ也

ハ何れ也。 ハ何れ也

ハ何れ也。 ハ何れ也

ハ何れ也。 ハ何れ也

水乃流くみくぬいよりて古くは物異楓軒 水香山 菅山氏 力記行

小上川源流一同阿武隈と九十九流入るるは阿武隈と流り付水と  
川喜上月お豫川の事と流るるは怪事ありと云はれり

國歌所詠

古今大分石所

あつては小舟ありわらうぬも君と云やういふくは末の

橋高伸船長隆要るなれりて流りたる時延は

ぬとさう中流うとくふ 隆資

全葉雜と

侍又好あつては十年ふりぬるをあつては川の遠さうぬ

みらのくふりもけめくまううふ付能永船長の

えぬはうとくふる 高階経重

物七介

ゆきぬあつては川のぬらうとぬ浮つあうせまうあふり別を

うとく 能永

君ふもむらう川と 魚ふも残と

一巻院よまつてはゆきせはをひさる

入道高木政之臣

洞元

そつ代ふあつては川の流るるもあつては

新撰

六帖

みらのくはあつては川の流るるもあつては

人知る

類聚

三流のくはあつては川の流るるもあつては



源川百首

藤原頭件

名もいふくはくはく川と流るる心もいふくはく川と流るる

権信正永保

同

名もいふくはくはく川と流るる心もいふくはく川と流るる

小侍従

千五百番

名もいふくはくはく川と流るる心もいふくはく川と流るる

経郷

全

名もいふくはくはく川と流るる心もいふくはく川と流るる

与み又とらふ

後撰巻一

名もいふくはくはく川と流るる心もいふくはく川と流るる

名もいふくはくはく川と流るる心もいふくはく川と流るる

藤原暲文

全二

名もいふくはくはく川と流るる心もいふくはく川と流るる

式部卿成範

初回二

名もいふくはくはく川と流るる心もいふくはく川と流るる

藤原秀宗

全

名もいふくはくはく川と流るる心もいふくはく川と流るる

前内大臣

後撰拾遺雜中

名もいふくはくはく川と流るる心もいふくはく川と流るる

祝部成之

新撰遠報中

續れはるはるをさぬる代りあふる川はたのたの

同表四

伊のめと海のふとあふるふとあふる海川のぬ地一ぬん

同表五

まらりふる務のふとあふるふとあふる川下りあふるふとあふる

建保二年名所百首正統

順徳院行製

名所百首正統集

あふるふとあふる川のふとあふるふとあふるの秋はさやゆらん

定家

全

まらりふる川の務の同秋をゆるぬ開もさるん

大藏卿有良

全

そのおと長くやあふるふとあふる川の地ぬるふとあふる

頼朝

与受人さるん

全

あふるふとあふる川のふとあふるふとあふるの国はあふるふとあふる

最勝曰天王院名所正統

後鳥羽院行製

全

風をさるふとあふる川のふとあふるふとあふるの袖のふとあふる

冬議雅経

全

まらりふとあふる川の川風はさるふとあふるふとあふる

建保四年百首

順徳院行製

全

はるふとあふる代とあふる代とあふる川のふとあふる

具親親王

全

おととし三月より五月の合曲川の名やたのむん

松道愚草

さくしつしつふもきりしつ川の名やたのむん

定家

中務家集

ちふ人

おととし三月より五月の合曲川の名やたのむん

全

重之集

あふ事とわらひもてぬまのあふらふくは我のいふまじ

名不百首

順徳院

長月やいふあり四月より五月の合曲川の名やたのむん

〓

我ら君ふらふく月川の水をさるるわらとくめたる歌と娘ふ

家隆

海草

さあさあむらさき命も早にぬふあふら川のほととせ

通無親王

〓 回國雜記

さくしつしつふもきりしつ川の名やたのむん

兵衛内侍

支本

あなぬらう遠方へもあふら川の七瀬の音より神のこゑつ

洞岩城郭と併して紫以哥句考之則此川往時<sup>ナ</sup>有七瀬

可知<sup>ル</sup>矣とららむとわらひもてぬまのあふら川の名やたのむん

大平村の初内おふくも川の内を七瀬と稱するふらつて

河大菅の名前といふことば七瀬よりわたりて流しなり  
 七瀬といふことば一より六にわたりてありて管を以て名をとりて  
 とおのりいへりぬふごとくともともる流して屋敷より出  
 ぬ

・國書所載

安福麻河 三代 実原

安福川 延喜式〇福之下 麻のまど殿と

青澳 史本

河武隈 同

會隈 類聚

河武隈 坊補下学集

河武隈 合類云 用集

河武隈川 名考

合曲川 八雲抄

合曲川 文系集

いのく月川 是よりのかたはありて月川と云ふことあり十一段あり

八雲 八雲抄

河武隈 名考

河武隈 深垣常川の初

河武隈 史本

あしく月 日録の 史本

河武隈 ね玉集

河武隈 方角

河武隈川 秋庭是 幸隆有

養治三河川安福の  
 管一なるも河川  
 と流す事其の  
 うみなり一可  
 想

同名

逢隈 秋書本 史本

・浴名題

浮太松山

只野より風系愛とてとらふ中氏の子書少の虎丸本を  
 遊具の地ありといふより便覧之少のゆゑに大ねら足跡にり鬼人  
 新住といふあやまれ昔長者の居城なりといへりつた宮城も  
 こといふと謂と尋ねるは妻の小鬼人あまて鬼ヶ城といふ鬼の  
 下館也といふといふ例のうたありて是ハ氣危うとありて  
 附合していふるは 名義 廻村に浮太松といふ事とありて  
 俗より不極楽浮太松やいふてねありたりといふ事とありて

あるは也因日承之記ニ官園出勢の際日市降淨イナリ云々小道茂木と訂て云々ニ越後の地名之おんゆ極宗  
形之六かある名の又ある一ともおもとあり一を  
ためく之ありつり一より引出て好事を流すを

香觸森山

石井の法名あふふより二十丁計りの南に有り花徑  
樵路ニ六日ニりくくもさるらあぬを遠きこよあふあ  
一日の夜登りて東山の二方の森林あり東南西の方  
く佳業あり巖壁めて橋木多く多く女生て室た仏境  
然るは同遊の権彼は山の佳ありづくと思々々権稱り

之ん事と強はとくさるおの道士田村は地名とあつた  
之ん事を好むとふ事され大絶勝の地の名は名佳好  
を改むありぬ事あり不唱ハえのゆくめて和漢に通し  
て字義語意俱々雅わんすと知べふ香觸の二字と  
填て香觸峯と初事と強して證句あり又云々いふ  
じ銘のふてふ白菊の花ふ香ふれの森は下れヤ界以香觸の  
名をくく可なりとして垣田慈匠詩あり青柳直枝初は是此  
らの詩初に入るの始なり梅は是よりして後世稱ゆは山の  
正稱とありてえの名の自くくればこそとありふ偏ふおの道  
士田村最ふふ

多景山

白岩村あり又大嶽より山頂空洞に隣屋中小入る実々  
奇絶なり之を地蔵と云ふところも凡人顔士の壹度此  
との希あり可惜 山名の假字ふ多景の名と月ひいハ多好景の  
まじり義ありけしを毛とるの假志なり

桃園

白岩村あり 白岩村あり 更此界の桃源蜀の桃園と始りて  
唐人の入るを毛して詩小作りしもの多しと云ふと其の  
品格極むる奴ありと云くむれり人しと云ふ愛奇なる事  
亦希と云れしは金葉集連歌の中は頼隆法師桃園の毛と云  
とくその桃の花と云はれんと云ふ事ありと云ふは桃園と

同くも亦古く事あり

三雄山

箕輪村あり三峰雄峻並立為伯叔怪岩如削寒岩如彫  
宛然好手之画地勢幽邃秋光可愛 名義 山本氏の書に徳聖  
本宮神宮那智之山とウツレテニツ所云と云ふ一記しはるは  
よりくはる月乃ひもや風等乃名身一なりと云ふ三峰相  
あはびく雄峻なるの如く一削りく云ふは削るの雄なる  
と云

岩石山

系瀬村あり山勢盤紆奇岩争聳怪石競立溪水漫山足青

松當峯頭亦似一幅好山水義鳴評雄山幽石山關雄山如  
隱士石山如俠客皆出倫之徒耳名義古俗カニセキ若石山とてり或人  
其不雅カニセキ若石山とてり或人其不雅カニセキ若石山とてり或人  
事と深る義鳴曰く此山若石山ありて若石山といひて若石山  
と人の稱とらハおのりいふ若石山といふと若石山といふ  
いと若石山といふ例もあらず今更ふり改りん中々若石山  
只る若石山といふ若石山といひてありんの中々若石山

制表圖山  
テウニシヤウ

上長折村有り絶巔空廓四顧無点翳昔人至此制表部内輿  
地圖土俗因稱十万合蓋合望封内之縣郷之謂也

児臺  
オコノテ

上川寄村部内逢隈川之涯ニ有り奇石疊層小大各成趣  
石間楓葉秋来深隈水金哉文集島山児臺孰優孰劣以純  
郷觀之島山幽児臺峻島山如柳下惠児臺如伯夷要之皆  
聖人之徒耳游児臺山水勝無適不怡目云々名義性業雲  
ヤハ付石と小橋と殺け児臺と一帯一帯たるもの名好り  
オコノテ

小島山

大平村ニアリ里人島寺トモ云ふ金哉文集ニ隈河距府城最近  
可遊之地亦多し中島山在于虞洲之東數里大平村其山

崔嵬西則牆如立北則枕流其水至此屈曲勢亦緩云云  
屏風岩

平石村アリ同書云屏風巖在薩埵原之南不見其根水涸  
則在沙上高一丈計南北二丈余東西四丈余其末戴土  
木叢篁不見石膚蓋不知其終幾十丈如數十牒屏風然上  
平下削自後登之則不大覺其峻實奇石矣

望洋山

山木屋ニアリ晴日山頂臨相馬之洋行舟之布帆歷可類鄉  
人名山曰高大石蓋山上有危石高峙者歎一作廣大師轉  
訛耳

彩虹瀑

上太田村ニアリ金峩文集彩虹瀑兩山夾列樹木叢篁瀑不  
甚高潭不大深怪石束之積為三層自潭而下山稍々遠山  
与水相距其間類步中日日光所映則滿澗為虹是瀑之所以  
得名也畧稍上有堂安置不動明王像故土俗曰稱不動瀑  
其有今名實自黃庭始云々義鳴曰く此瀑布廣瀬川の源也  
と云く廣瀬流より不動庵よりハ人物乃條乃ハ也

銚子飛泉

玉井村ニ有リ源奈于安達多良山至此有岩岩凹如銚以吐吞瀑水  
是瀑之所  
以取名也  
瀑水直下類似兩岸稍隘嶮岩突起水觸而激左裂右剪如



曝類幅之帛瀑之奇觀部内無比之者云、更名、猿岩、未知何謂、

我、封内と山より川に傍たる地ふふ、又、吾、可、也、方、い  
いと多うんとく、あ、と、く、い

偽名所

野田

野田とて、あ、と、八幡村の端、郷、有、り、中、以、野、田、新、田、因  
爲、て、今、と、野、田、新、田、村、と、す、か、さ、村、は、あ、あ、ゆ、う、と、名、不、傳  
ぬ、書、く、爲、あ、つ、の、里、人、や、野、田、の、若、草、と、も、く、ら、ん、と、も、と、あ、こ  
秋、の、山、川、の、名、と、す、す、と、い、あ、り、と、い、と、く、只、あ、ふ、け、る、る  
田、を、む、く、く、い、た、る、あ、り、野、田、新、田、名、而、あ、り、地、は、組、あ、り、と、い

秋、の、中、日、野、田、と、い、地、は、あ、り、と、い、別、而、之、同、名、志、に、性、く  
と、あ、り、と、い

世系

五月、あ、り、と、い、と、い、小、世、の、原、と、新、と、新、と、い、今、の、世、系、村  
あ、り、と、可、有、り、と、い、同、書、ぬ、玉、の、井、は、原、と、い、と、い、小、世、の、原、と、い、と、い、  
い、い、と、い、是、も、あ、り、と、い、た、あ、り、と、い、定、り、た、る、地、の、名、と、い、と、い、  
ゆ、の、と、い、尚、尋、ぬ、と、い、と、い

玉ノ井

同書、玉ノ井の証、考、ぬ、史、本、集、爲、相、卿、乃、お、り、と、い、ぬ、と、い、八、里、の  
名、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、玉、の、井、の、名、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、

井はら塚の同名ありて此類と云ふを多しきりしむるの  
証と云ふべし

野中ノ清水

此清水と油井村の内八番丁より乾ニあり街道の左方の方小川の  
清水と云ふ所ひれと圖書に云ふを以て其の清水は清水の  
の字を引たり義明抄と云ふ奥儀抄小野中清水と播磨小  
野の字ありて首ハ目出なるありと云ふと其の世も如く  
なり如きも昔と云ふはいたるものハ汲水と云ふなり  
此國物産り又と教林良材其外ハ書也と皆播列ありと  
あると云ふ引たるは云々云々の事なり一覽に記中清水に

書く義家朝臣今之八幡稲葉ト云フ處ヨリ遠矣ヲ射タニコレニ  
其矢筈の中程述之あるより漏出ノ清水なる名有りと云  
其事の實否ハ云々是ハ此清水之古傳ナルヘキ又田國雜記ハ  
關之清水云々標註ニ云東遊行囊抄ニ野中清水陸奥國二本松之良  
野中ニ淨水有り播戸ニ同名有り此處モ名所之ヨレ里俗の傳あり云々  
野川良極小東遊記之野中清水と云ひて云々も此記ハ野の清水と  
關ありしと云々人の傳ひあやまりしと云々實ハ片平村の石に  
安後ら山乃井の字ありと云々在後考と云々とあり云々  
にやまりたりと

霞関

名不詮及郭外松坂口乃との岸とりトテ三首の古歌と引あり一本  
と是と同一ク好も江戸名勝志曰梅田河内ヨリ河内未申の古歌と  
以是姓古の奥列海乃りく東の名所なりとありと梅乃麻是小也  
武蔵とありと世々やまをくむらと梅地ゆら丁一和日とふ府城の  
美鳩門より松坂口迄と大方河内計りめて方位もまは未申と通し  
且と辰城ト云ふ極もありと名も一く行人の標極したる也  
ありとありといつと野田より以下乃色陸多ありとりと河内  
新松ももくもくはなはるくはなはるくはなはるくはなはるくはなはるく

冷泉左中ね高之島丸左の我我の由我我我の神祠佛すに  
まうしうまひしは新くといふと名集りく石田氏と随筆ふ

収りたることと女縁して情事の如とんさしては卿あらハえ福  
乃はを女いりくさうりしやとあともさうりし或人さうりぬ  
伊うぬらゆらめくまくとものいひつゝんとも又つ  
むらうあしん私女あつた

慈明公之門後賢ハ根當莫門隆之卿乃は女とてねと  
ありぬははは海たとあつともいひしや

太神宮 遍照尊帝

山霞

世々ありし神も好くは神路の衣今新やあつたん

春夕月

白くふたの木枝より夕月を

帰る

暖かな夕月を古里へ帰る

帰る

分るる夕月を白雲の末に

挿花

まよりし名残もけし梅花

惜花

よふふと月あり甲斐の

暮春夜

は道ゆくも立ちとめて

郭公鳥

あふれは神垣をけりて

五月雨

はあふた夕月をけりて

江景

水くさ入江のあけ夕月

七夕

侍あふる夕月の清き天の川

草花巻

咲きゆく世のふ種は花毎又まよふ露のよとゆきぬ

野麻

のさりとていと急とて武彦殿たまをわひて男麻ゆめを

月出峯

まのゆふを捧ふ秋とわく春立をるはるのよやと春

海邊の月

春小舟海東遠くこゝろゆくありはる月又ふらふりて春

暁月

けしきよのつとなく秋の月ふれうらやまのあけのつと

紅葉

あけのつとなく秋の月ふれうらやまのあけのつと

時雨

時乃同く時雨とくくは浮きの又三海つとくはりて

池水巻

あけのつとなく秋の月ふれうらやまのあけのつと

深雪

あけのつとなく秋の月ふれうらやまのあけのつと

忍恋

あけのつとなく秋の月ふれうらやまのあけのつと

待徳

肩の間にさかすか目と見えたりおろしきにて是もあまら

初達意

上座の身つあゝぬか癖の初は花より地さるりといふ

別意

又いけと染ても尚あまらふ今のわう道と云の事も如

経年意

あうとと忘る中又年として可くはらるゝぬか井の下の事

嶺松

養りとも縁もさるゝぬかけはる名も砂乃みおれねらね

名所歌

花をみらうらうらふとてたてぬかに織てはるる布引乃歌

山家

花れきてはるひあまらぬかあの花よりしとふ紫の飯屋

述懐

思ふとふ事とあまらぬか眼のちる身とぬか思ひて是れ歌を

神祇

素直なり人の名や天照神のまぐみのまうらふらん

富士明神

塩浜村塩浜寺

山辰

春ハ初ニシテ冬ニ至リて夏ノ根ハ冬ニ至リて

秋冬

去ノ冬ハ初ニシテ冬ニ至リて夏ノ根ハ冬ニ至リて

夢覚

夏草ノ志ハ初ニシテ冬ニ至リて夏ノ根ハ冬ニ至リて

初陽

列木ニ至リて冬ニ至リて夏ノ根ハ冬ニ至リて

揚衣

秋風ニ至リて冬ニ至リて夏ノ根ハ冬ニ至リて

冬月

吾等ノ志ハ初ニシテ冬ニ至リて夏ノ根ハ冬ニ至リて

待衣

何リとも頼じうひりて冬ニ至リて夏ノ根ハ冬ニ至リて

別衣

名沙ニ至リて冬ニ至リて夏ノ根ハ冬ニ至リて

曉鐘

世ノ憂ハ初ニシテ冬ニ至リて夏ノ根ハ冬ニ至リて

神祇

天地ノ志ハ初ニシテ冬ニ至リて夏ノ根ハ冬ニ至リて

稻荷大明神

府下神宮寺

山苑

おとくさるう尚ほとひて梅花はるるをうらなひて

野崎亭

ゆきりらの瑞雲さきりりややう定りぬゆりて

江月

吹わくふ芦同又教をわのこえて浦をさうらね波江の月

里雲

一とらの輝をさうらね移りて雲ゆりうらむ遠のるすはと

社頭記

稲荷山はよしの晴と照映してうらむてあけのさか

愛宕 府下長泉寺

朝桜

はるさけの名のをねとまゝに今朝の空余白入空のうけ

山梅

まるとくく白き梅ぬらとやうや梅の花はうらうら

郭公

さきりらのさのふゆとつやうとくはるるさうらうら

秋原



あふる袖よりけりてあはれにわらふもとむる秋の風

夜床

あふる尾とけりてあはれにわらふもとむる秋の風

時雨

あふる尾とけりてあはれにわらふもとむる秋の風

忍恋

あふる尾とけりてあはれにわらふもとむる秋の風

久恋

あふる尾とけりてあはれにわらふもとむる秋の風

羈旅

あふる尾とけりてあはれにわらふもとむる秋の風

あふる尾とけりてあはれにわらふもとむる秋の風

社頭祝

あふる尾とけりてあはれにわらふもとむる秋の風

文珠 府下遍照尊寺

春雨

あふる尾とけりてあはれにわらふもとむる秋の風

夏月

あふる尾とけりてあはれにわらふもとむる秋の風

秋露

秋涼より種の花のまじりぬまうとわらふ庭の夕涼中

冬風

きたぬとさうりつぬのともよしたるやうとさう風の音は

釋教

法のもめきみのやく作をたれととりて親乃らのあうき

八幡宮 多田村

早春梅

伊とくやこ今初と古宗又出る日の光るゆゑむまはる

梅羹風

さとし来る涼ふ白ひや玉ぬりの小簾のむりわる梅の遊風

寄神祇

うこもいふふ西川社乃楸葉をいかにわらふ世とまじり

日吉山王権現 御井宮下

時鳥

本かくとよき鳥入初音もさるのこもくたれりし時鳥をうたふ

早苗

まじ秋乃たのまのうきとてみよ佃をうら山田ふ早苗をうたふ

神祇

そむくつふ所代の糸に染みぬ日名の神も君も

遺布禰明神 下取田村

卯花以月

卯花のほろふ垣根とあそびたなまの影のころ月とそな

郭公何方

しづくもゆきまこしめぬ郭公もつをを雲のりあ

社醜祀

こころのさとあふうはして考布祢川をてと作く波乃白く

白蛇明神 油井満福寺

新樹

花もこし梅もつらとあはれて夏とわつらの産と涼と

時鳥

木の戸もふらとたひ一かどと我もふゆもせぬす乃悲ひ

神祇

初るとよ我う代とやしく人のあはれうみは末と承うと

安達を良明神 中宮村

岡杜宇

國つよりのみ定む夕やみの山の中をたぬるはのけりし海  
橋董枕

誰うそとてやいしとてり神のまはれぬすの枕よりくわも橋  
社頭祝

あなうらはらのいさりとうとうとて跡たどとり神を堅負

飯沼明神 原頼村

題詞

たろくふとくもとくはぬ高雲の夕しやうるうの玉章

海邊月

ふり端のうそとてはのふ人やあはぬも月と月とあらん

神祇

ととの海神は恵りあつとくも氷の上のかうひ路

八幡宮 府下香泉寺

聞持衣

小友更くまもとくとの麻衣う川神をうく麻やまをる系

紅葉源

山指のむのうけりきふしは海くまもとくも木く乃とみし系

神祇

朝夕多し多しは枝は始の春花乃地をば神を多し

楳嶽竹前 庄澤村

山月

雲はくも禁ふとわく縁をくくもとみりわらふ山を湯の月

中野

都乃あや露のたてぬおちてこみ神垣をしりやあや

神祇

静と空ををや原うもくくもとて一もあてと初る神の志あけハ

隠津島明神

原書小本宮ト有リサレト其村ニ此神在レニサキハ  
堀之内ノ隈ナルヘレ但元祿之代ハ此神モ在レタルニヤ

初煉朝風

秋来ぬと今朝より若ていと花は初陽の穂下りともく初風

草花霞濕

直とてく草乃をの枝毎々ともくみとも雪道乃ともく花中

湖水眺望

とくはやく張もなきて左海をけり波をくともあふ月こも

愛宕 本宮

石道

庭にありて秋をよむるの事を踏しはくといふ

萬掛松

晴れぬねむりも涼しきと相しきるるはるのともなふ

寄月神祇

あはれき神の心をしるしとや今もくわゆるはるの後に

観音 全五

山月

吹くふねの嵐もよそくねをきりしりぬる月にはや

野月

更らよつぬはあはれをいづるをわらわしきく月の夜は

釋教

猶もよそをきりしりぬる月にはや

薬師 全五 浄土寺

残暑

吹あはれ風はあはれと神しるしはるのともなふ

秋露

庭にありて秋をよむるの事を踏しはくといふ

釋教

くちしとせしとてつるふもよみとくふ佛の恵町

観音 府下龜谷町

初春

まよふと出る日影も長閑なり世とあつ玉の光とみゆ

霞

きくひりふたふとんては原の波もよりの春の明かり

鶯

咲あぬまの江の梅もま若くあつり白く枝のうへもあ

梅

窓の中とけりうきれて玉た道のここの際ゆる庭の梅枝

櫻

待わたる庭の一木は梅花とありとせたりをときつゝもあ

落花

しらむとけりやとくくくくくくくくくくくくくくくくく

卯花

あつ月のをとぬと玉の晴るふとそり庭のうけとぬ

郭公

おとし在乃夏つあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

早苗

時事如くゆく子町田も交女子の吾子起りてゆく

床夏

夕風ぬらりてと急流浅くしの露を釣るるをこ夏乃也

荒和後

浅らとらあひくも涼し河後川あき風をこねみ乃白たふ

初秋

秋来ぬと夕乃そ又吹替る風ぬぬちる法中を身ゆむ

萩

物森乃松又と身萩の葉ぬしとぬ家や着もくして

鹿

ら里とあれてもきて小男鹿乃妻こつ此の秋と切ゆ

月

晴りの世とこいさるもそころあり月を程うよその極言

橋衣

おとらの御着もよ遠小女更く雅うためいそく里の砦と

紅葉

秋のまら尚月ぬ流るる霧をの流ふらしくねれあこのお

時雨

晴くわつと定あつた世のあめもとねれふねあらし

落葉



流るるん跡とてふくれ日なるといつのころとふをわの糸

水

わがくういよとてふもふ糸のあなるといひをきやうあ

雪

わさく程つゆとてふの糸あふ糸あり初ふ糸の白き

紫雲

とてふもふ糸のあなるといひをきやうあ

初意

意のさく入るとてふもふ糸のあなるといひをきやうあ

後意

後のせとてふもふ糸のあなるといひをきやうあ

逢意

ほろり〜世年月のう〜もふ糸のあなるといひをきやうあ

別意

又い川とてふもふ糸のあなるといひをきやうあ

久恋

和ぬりて歳を〜波のき糸川通ぬと神又新来ぬる年

恨意

あふ事と申す同遠のあふ糸〜もふ糸のあなるといひをきやうあ

山家

世とていふは捨とて六の星のわらありやとていふは

縁

はつてたは世と縁の中宿と縁のつら縁のまの白枕

述懐

とれつひありとて世の中ひつらつらものともや他りん

釋放

あつては身とあつて世と縁とあつての世にあり

神祇

星あつて人のをや天地の神もつらつらとあり

義晴は神佛とあつて新名とあつておもしろ

成人女とあつてと成人縁とてとて古より世は開ける

今もあつて今も今も世は新名とあつてはつてはん

加めも深く答へる事わらうとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

名もとりとて始りてとて名も有るあつてとてとて

人や風流男とてとてとてとてとてとてとてとて

そ名のとてとてとてとてとてとてとてとてとて

誰も知らずとてとてとてとてとてとてとてとて

那んとてとてとてとてとてとてとてとてとて

此のいてとてとてとてとてとてとてとてとて

とて



和意のまじりしもの多しこころを結つていふ事  
けふおのころにわづらひし我邦のこころを幸ひける  
也

和意

